

日本の炭鉱遺産の活用状況に関する基礎調査

準会員 ○伊藤友梨 1*
 正会員 岡松道雄 2**
 正会員 宋 俊煥 3***

炭鉱 遺産 近代化
 遺産の活用 産業の移行

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

日本には、かつて多数の炭鉱が存在し、石炭産業が繁栄していた。しかし、現在日本で稼働している炭鉱は、釧路コールマインの1つのみとなった。石炭産業は廃れてしまったが、炭鉱遺産(以下、遺産)は全国各地に残っている。遺産も保存されているものはわずかで、その多くが消滅の危機にある¹⁾。

遺産を保存・活用し、旧産炭地域を再生する事は、日本の近代化に大きな役割を果たしてきた炭鉱の歴史、世界有数の採炭技術、職人の誇りや力を後世に伝達し、これからの未来を創造するために重要なまちづくりの手法の1つと考える。

本研究では、日本全国の遺産の保存と活用、それによる旧産炭地域の再生事例を時代ごとに整理し、日本の遺産の現況を分析するとともに今後の遺産活用の課題について考察することを目的とする。

1.2 研究の方法

まず、日本全国の炭鉱があった場所と変遷について調べ、各炭鉱の遺産の現況を表にした。次に、表の結果を時代ごとに地図上に表した。最後に、表の結果を集計して比較し、地域ごとの特徴を整理した。

2 日本の炭鉱遺産の概要

2.1 主な炭田の位置

図1に日本の主な炭田の位置を示す。国内には北海道、福島、山口、九州を中心に炭鉱跡地が存在し、沖縄にも存在した。

2.2 炭田の変遷

図2に日本の石炭生産量・輸入量の変遷を示す。その過程は5つに分類できる。表1にその時代区分を現す。

3 各炭鉱の保存・活用状況

3.1 炭鉱遺産の保存・活用状況による分類

図1に示した全国の炭田について一覧表を作成し、遺産が、現在消滅・放置されているもの、保存・活用されているもの、重要文化財、登録有形文化財、史跡名勝天然記念物、世界遺産などに登録されているもの、閉山後に新しく建設されたものに分類した。表の結果を時代ごとに地図上に表した。図3は2006年～2022年を抜粋したも

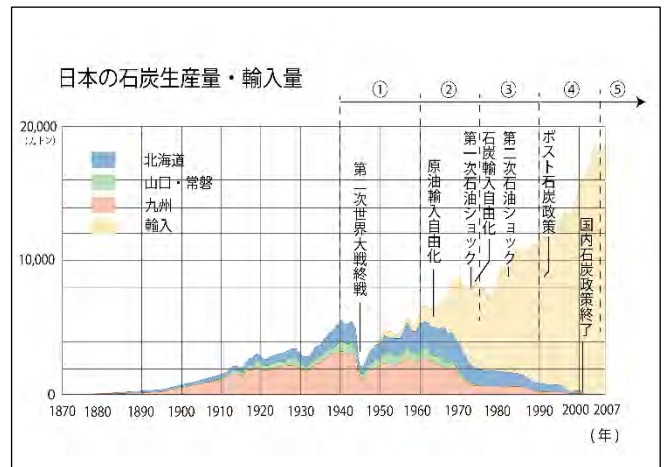
図1 日本の主な炭田¹⁾図2 日本の石炭生産量・輸入量²⁾

表1 時代区分

時代区分	年	時代
①	1940～1960	第二次世界大戦の終戦により、石炭需要が一時的に下がるが、再び需要が高まっていく
②	1961～1975	エネルギー革命が起こる
③	1976～1990	石炭産業が最終的崩壊局面を迎える
④	1991～2005	国内での本格的な採炭(坑内掘り)が終了する
⑤	2006～2022	国内の石炭産業が終わり、閉山後の炭鉱遺産の価値が見直されていく

のである。

⑤2006年～2022年

2011年:東日本大震災
2015年:「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼・造船・石炭産業」が世界遺産登録

「炭鉱遺産の価値が見直される時代に。
閉山後の地域差が大きくあらわれる」

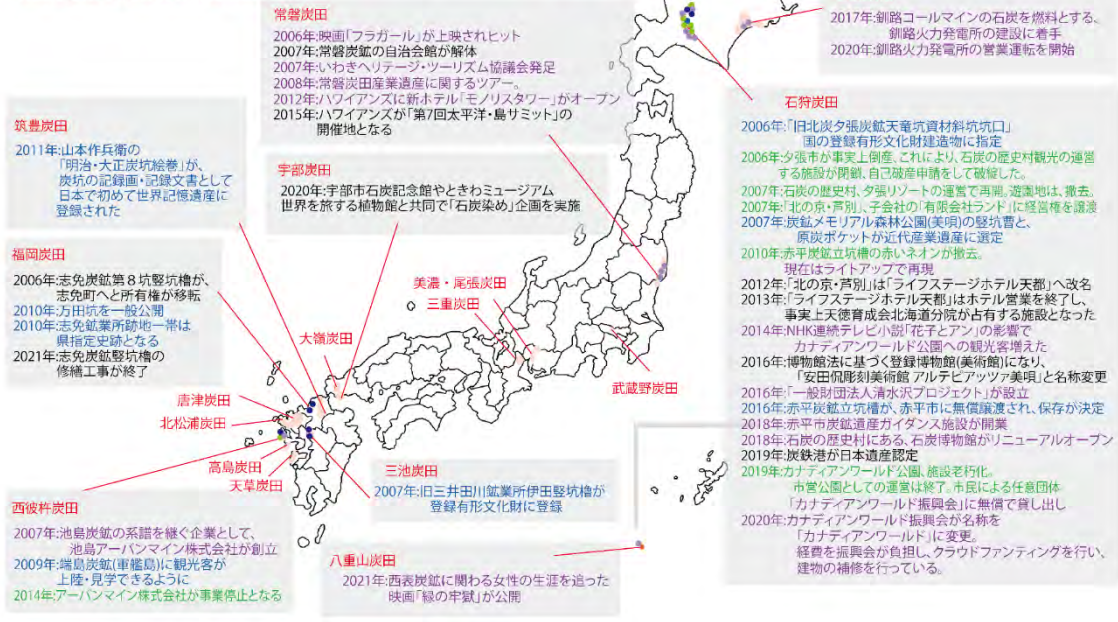


図 3 2006年～2022年:炭鉱遺産の価値が見直される時代(全体の変遷の中抜粋)³⁾⁴⁾

3.2 炭鉱遺産の登録や保存・活用の割合

表3～表7は全国の炭鉱の一覧表を基に各地域の遺産を4つに分類したものである。遺産の登録・非登録の数を横軸に、保存・活用・非活用の数を縦軸にして、その割合も示した。

表3 北海道の活用状況

北海道	保存・活用	非活用	合計
登録	23 12.17%	17 8.99%	40 21.16%
非登録	61 32.28%	88 46.56%	149 78.84%
合計	84 44.44%	105 55.56%	189

表4 福島の活用状況

福島	保存・活用	非活用	合計
登録	6 10.53%	9 15.79%	15 26.32%
非登録	14 24.56%	28 49.12%	42 73.68%
合計	20 35.09%	37 64.91%	57

表5 九州の活用状況

九州	保存・活用	非活用	合計
登録	51 55.43%	9 9.78%	60 65.22%
非登録	23 25.00%	9 9.78%	32 34.78%
合計	74 80.43%	18 19.57%	92

表6 山口の活用状況

山口	保存・活用	非活用	合計
登録	7 36.84%	1 5.26%	8 42.11%
非登録	3 15.79%	8 42.11%	11 57.89%
合計	10 52.63%	9 47.37%	19

表7 沖縄の活用状況

沖縄	保存・活用	非活用	合計
登録	0 0.00%	1 50.00%	1 50.00%
非登録	1 50.00%	0 0.00%	1 50.00%
合計	1 50.00%	1 50.00%	2

4 おわりに

北海道は、遺産が放置され、消滅の危機にある地域も多かったが、近年、炭鉱港が日本遺産に登録されたり、市民活動が活発となったり、炭鉱の歴史を伝え、地域を活性化しようとする動きが出てきている。しかし、それでも保存されている遺産の割合は少ない。福島県は、炭鉱から観光産業への移行が成功し、ヘリテージツーリズムも行われているが、実際に保存・活用されている遺産は少なく、登録されている遺産も少ない。山口県は、早くに閉山が行われ、工業に移行したが、その際ほとんどの遺産が撤去された。そのため、登録・保存されている遺産の割合は高いが、数が少ない。また、登録・保存されていても上手く活用できていないように見られる。九州は、多くの地域が、世界遺産や、重要文化財、登録有形文化財に登録されており、遺産の保存・活用が活発にされている地域である。沖縄県は、資料が少なく、詳しく調べることができなかったが、調べた遺産は、放置され自然と同化している状態であった。

全国の放置されている遺産をもっと活用し、市民が親しみをもって触れ合える場所にする余地がある。

【参考文献】

- 1) 大野達也(編):炭鉱遺産をゆく、イカロス出版株式会社,2021
- 2) 上原正文:石炭採掘技術,(財)石炭エネルギーセンター,2011
- 3) 文化庁:国指定文化財等データベース,
<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/searchlist>,(2022.12.23 閲覧)
- 4) 庵田綾宇:産業考古学研究室,
<http://kourokan.main.jp/index.html>,(2022.12.23 閲覧)

*1 山口大学大学院創成科学研究科
*2 山口大学大学院創成科学研究科 教授・博士(工学)
*3 山口大学大学院創成科学研究科 准教授 博士(環境学)

*1 Graduate Student, Department of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ.
*2 Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.
*3 Associate Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D